

第6回国際マレーシア学会議

——2008年8月5～7日 サラワク州クチン——

福島康博*

第6回国際マレーシア学会議(Sixth International Malaysian Studies Conference、MSC6)が、2008年8月5日から7日にかけての3日間の日程で、サラワク州の州都クチンにあるクラウン・プラザ・リバーサイド・ホテル(Crowne Plaza Riverside Hotel)を会場として実施された。私は、マレーシア社会科学学会(Persatuan Sains Social Malaysia、PSSM)が隔年で主催している同会議に初めて出席したのだが、今大会の状況や会場で受けた印象をここに報告したい。

マレーシアが2007年に独立50周年を迎えたことを記念して、今大会は「マレーシアの近代化に関与して——50年、さらに未来へ(Engaging Malaysian Modernity: 50 Years and Beyond)」というメイン・テーマが掲げられた。このテーマを象徴するかのような出来事が、大会初日のオープニング・セレモニーにおいて行われた。すなわち、2名のマレーシア人研究者が国際的な学術賞を受賞したことが報告されたのである。1人は、国際連合経済担当事務総長補佐を務める経済学者のジョモ・K・S氏(Jomo K. S.)で、ロシア自然科学アカデミー(Russian Academy of Natural Science)が主催するワシリー・レオンチエフ賞(Wassily Leontief Prize for Advancing the Frontiers of Economic Thought)を2007年に受賞した。もう1人は、マレーシア国民大学(Universiti Kebangsaan Malaysia、UKM)の民族問題研究所(Institute of Ethnic

Studies、KITA)で所長を務めている人類学者のシャムスル・A・B氏(Shamsul A. B.)で、福岡市と(財)よかトピア記念国際財団から福岡アジア文化賞学術研究賞(Fukuoka Academic Prize)を2008年に贈られた。

PSSMとのつながりも深い両氏は、経済学と人類学という異なる学問的視点、研究手法を用いながらも、マレーシアの近代化を視野に入れた研究を行っている点では共通している。そうしたことから、両氏の国際的な学術賞の受賞が、「マレーシア人によるマレーシア研究」の水準が高まり国際的な評価を得るに至ったシンボリックな存在として扱われた。これを受ける形で、シャムスル氏は、ロイヤル・メルボルン工科大学(RMIT University)のポール・ジェームズ氏(Paul James)による基調講演1の司会を行い、またジョモ氏は基調講演4にて登壇するプログラムが組まれる¹など、両氏に配慮した大会運営がなされた。

マレーシア50年の近代化が今大会のメイン・テーマに掲げられた一方で、今大会を特徴づけるものとしてもう一つ重要なファクターとなったのが、マレーシア・サラワク大学社会科学部(Faculty of Social Science, Universiti Malaysia Sarawak, UNIMAS)がホスト校兼共催者となったことであった。これまで5回行われ

* 桜美林大学国際学研究所

¹ ジョモ氏は、大会3日目の8月7日に基調講演が行われる予定であったが、残念ながら所用により急遽欠席となり、その後の大会プログラムが繰り上がること

てきたMSCは、いずれもマレー半島側で開催されたものであり、6 回目にして初めてボルネオ島の東マレーシア側での開催となった。これにより、これまで半島側にアクセスしにくかった、あるいは半島側からあまり関心を払われてこなかったサバ州やサラワク州を研究対象とする報告が多数なされた。この結果今大会は、72 のセッションで286 本の報告²が行われ、前々回 2004 年のMSC4 の2 倍以上(140 本³)、前回 2006 年のほぼ 1.5 倍(193 本⁴)という、過去に例のない大規模な大会となった。

そのため、3 日間にわたり朝 8 時から夕方 6 時まで、6 会場にてセッションが同時並行で行われることになり、一人で全てのセッションに顔を出したり、フル・ペーパーないしはハンドアウトを全て入手することはどうも不可能であった。ただ、この点は PSSM 側からも配慮がなされており、各報告がどのセッションで行われるか PSSM の公式ウェブサイトプログラムが事前に公開されたり、事務局に事前提出された全てのフル・ペーパーを収めた CD-ROM が当日配布されたりするなど、大会規模に応じた事前準備がなされていたことがうかがわれた。

サバ・サラワク州を研究対象とするボルネオ研究と、半島側マレーシアを主眼としたいいわゆるマレーシア研究との関係性をめぐる議論は、各セッ

ションや基調講演において活発に行われた。基調講演 2 のスピーカーである UNIMAS のアブドゥル・ハリム・アリ氏(Abdul Halim Ali)や、基調講演 3 を行ったリーズ大学(University of Leeds)のビクター・キング氏(Victor T. King)の講演においては、ボルネオ研究の発展の歴史とその重要性が強調された。東マレーシアには、半島側にはない歴史的・政治的・民族的な独自性が存在しており、この点に留意しつつも両地域を包摂するような視点・研究手法の重要性が語られた。またボルネオ研究においては、インドネシア側によるカリマンタン研究との連携・相互比較も欠くことができない。このように、一方では半島側との整合性に配慮しつつ、他方ではカリマンタン側との比較がなされるボルネオ研究は、半島側を対象とした研究に比べて立ち遅れている面があるために、今後さらに発展させていく必要があることが繰り返し強調された。また、基調講演だけにとどまらず個別の報告においても、例えば先の総選挙の結果に関する研究に対して「サバ・サラワク両州を見過ごし、半島側だけを分析してマレーシア全体の政治動向を論じるというのは、議論が浅薄ではないか」という批判的なコメントがフロアから出されるなど、両地域の研究の有機的な連関の重要性が今大会を通じて参加者に強く意識されるようになった、という印象を受けた。

72 のセッションを見てみると、パネルが全体のほぼ 4 分の 1 にあたる 19 セッションで、残る 53 セッションが個別報告に基づくものであった。パネルを組織したのは、ホスト校兼共催者である UNIMAS、同じく共催者である UKM のマレーシア・国際学研究所(Institute of Malaysian

になった。

² 当日配布された要旨集に基づく。ただし、当日になって報告がキャンセルされたものも若干あったため、実際の報告数はこれよりも少ない。

³ 坪井・鈴木・篠崎(2004)、「第 4 回マレーシア研究国際会議」*JAMS News*, No.30, p.12。

⁴ 井口由布(2006)、「「ロジャツ」の可能性:第 5 回国際マレーシア学会議に参加して」*JAMS News*, No.36, p.25。

and International Studies、IKMAS)と西洋学研究所(Institute of Occidental Studies、IKON)、および今大会の支援者であるマレーシア・ユネスコ国内委員会(Malaysian National Commission for UNESCO)が中心となった。これらの機関以外にも、UMS、UPM、UPNM、UUM といったマレーシア国内の大学がパネルを主催していた。

他方、個別報告においては、PSSM が報告募集時に15のサブ・テーマを掲げつつも、これらテーマにこだわらない内容の報告も受け付けたため、社会科学を中心に多様なトピックを扱う報告がなされた。全般的な傾向としては、報告の募集期間が本年3月の総選挙の時期に重なったため、政治学的視点による連邦議会や州議会選挙の分析や、あるいはクランタン州など特定地域の政治を扱った報告が突出して多かった。これと並ぶのがサラワク州を中心としたボルネオ研究で、他にも教育・人的資源、結婚・家族・高齢者・ジェンダー、民族・言語・宗教、経済・経営、メディアとインターネット、伝統文化・都市化・近代化、開発と環境、などの多岐にわたるトピックについて、おおまかな研究テーマごとに2-5本の報告が一つのセッションとしてまとめられていた。セッションごとの時間配分は、1時間30分という割り当て時間うち、まず報告1本につき12~15分の時間を割り、全ての報告が残り残った時間をまとめて質疑応答に費やされた。

この方法では、パネルのように特定のテーマ性を有するセッションにおいては、各報告者に対して同一の質問を投げかけることができるというメリットがあるものの、報告者間で問題意識が共有されていないと、報告者どうしの効果的なディス

カッションが行えなくなる。今大会では286本からなる多彩な報告がなされたとはいえ、各報告があまりに多様であるがゆえに、1つにまとめるにはいささか疑問を感じられたセッションもあった。例えば、仲橋源太会員によるクランタン州におけるPAS 政権の支持基盤を分析した報告”The Pondok and Kelantan Politics: A Study of the Political of the Pondok in Kelantan”は、本来ならば地方政治や選挙分析といったセッションに組み込まれてしかるべき内容であったが、調査対象が伝統的なマレー・イスラームの学校であるポンドクであるという理由から「伝統文化と教育(Traditional Culture and Education)」のセッションに配置された。このセッションでは、他にはマレーの伝統武術であるシラットやサラワク州におけるマレー語教育、およびサラワク州福建人の母子間で使用される言語の報告がなされており、もう少し配慮がなされれば良かったのではないかと感じられた。

3日間を通じて行われた各セッションのうち、私は自身の関心テーマである経済・経営学系の報告を扱うセッションを中心に出席した。この分野での発表動向を概観すると、経済学系においては、「経済発展(Economic Development)」「海外投資と経済成長(Foreign Investment and Economic Growth)」「海外投資、中小企業、積極的差別肯定措置(Foreign Investment, SMEs and Affirmative Action)」と題するセッションが生まれ、マレーシアの国内経済の発展と海外からの資本流入との関係や、あるいはブミプトラ政策のような経済分野における積極的差別

肯定措置⁵について、歴史的変遷を視野に入れつつ現在の状況を分析したり、あるいは諸外国との比較を行った発表がなされた。他にも、公共部門における官民共同事業の現状、建設業を対象とした産業分析など興味深い発表がなされた。

他方、経営学の分野では、わずかにコーポレート・ガバナンスに関して、会社法改正に伴う株主総会の開催地選択の問題を扱った発表が行われたに過ぎなかった。1997年にアジア通貨危機が発生してすでに11年、金融制度改革と並んで適切なコーポレート・ガバナンスの実施が求められたマレーシアにおいて、一時期盛んに行われたこの分野の研究は、ここへきて下火になった感があつた。

JAMS会員による報告について触れておきたい。既述の仲橋、吉村両会員以外にも、篠崎香織会員による”Some Aspects of Ethnic Perception in Modernization: Penang at the Beginning of the 20th Century”、加藤裕美会員による”Oral History of Sihan Mobility and Their Relationship with Neighboring Ethnic Groups”、相原啓人会員による”Myth or Realities of Human Capital Theory: Evidence from Higher Education and Labour markets in Malaysia”という報告がなされた。残念ながら、私はこれらの報告を拝聴することが出来なかったが、各報告が属していたセッションにおいて有意義な議論がなされたことと思う。

大会最終日のクロージング・セッションにおい

て、次回 MSC7 の概要が発表された。MSC7 は、2010年8月にマレーシア科学大学(Universiti Sains Malaysia, USM)をホスト校として開催されることになった。詳しい日程と開催場所は未定であるが、おそらくペナン島の USM 校内かあるいはジョージ・タウン周辺のホテルになると思われる。MSC は再び半島側で開催されることになるが、USM が PSSM のホスト校となるのは次回が初めてである。UNIMAS がホスト校になったことによって、MSC6 はボルネオ研究に焦点が当てられるようになった。これと同じように MSC7 においては、USM の独自性が前面に出るような大会運営が行われることを期待したい。

⁵ この報告”Affirmative Action for Majority: An International Comparative Study”は、吉村真子会員によるもの。